

太田俊雄の宗教教育思想（三）

山田 耕太

1. はじめに

前稿までは、太田俊雄の50年近い教師生活を四期に分けて、敬和学園高校を創立して初代校長になる以前の教師生活第二期にあたる日本聖書神学校教授時代（1952－1966年）に著わした論文を資料にして考察し、ノースセントラル大学（North Central College）とエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校（Evangelical Theological Seminary）で学んだ留学時代（1949－1952年）に特に関心を注いだホーレス・ブッシュネルとランドルフ・C. ミラーの宗教教育思想の一端を明らかにした。⁽¹⁾

続いて、教師生活の第一期にあたる宮城県立古川高等女学校・青森県立旧制青森中学校・滋賀県立旧制水口中学校・大阪府立旧制八尾中学校・大阪の私立燈影女学院高校での英語教師時代（1935－1949年）に太田俊雄に多大な影響を与えた小原国芳、羽仁もと子、河井道の宗教教育思想ならびに実践とその思想的系譜を明らかにした。⁽²⁾

本稿では、それら以前に太田俊雄が主として旧制中学岡山巒で出会い、理想的な教師のモデルとして決定的な影響を受けた柴田俊太郎と柴田に多大な影響を与えた本間俊平の宗教教育の実践の一端について明らかにして、小原国芳・羽仁もと子・河井道の教育実践に影響を受けた太田俊雄と敬和学園の教育理念と教育実践の淵源を示唆したい。

2. 「三俊」

太田俊雄は、岡山巒の二年生の時に青年英語教師の柴田俊太郎と出会った。五、六人の生徒たちが柴田俊太郎に課外授業を願って、ロングフェローの詩「矢と歌」を習った直後に、柴田に呼び止められて、「三俊」すなわち「天下の三人の俊秀」を知っているかと太田は問われた。⁽³⁾

「三俊」の第一は、秋吉台の石切り場で囚人たちの更生保護事業を行なって聖人と言われた本間俊平である。第二は、型破りで豪快な教師であった柴田俊太郎であり、柴田は快心の笑みを湛えて「このおれだ」と太田に言った。第三は、太田俊雄であり、柴田は太田に対して「君だ、日本一の生徒だ、しっかりせえ」と言い放った。

太田はそれまで、父親が石切り職人であり、社会的地位も低く、貧乏生活をし、無学であることに劣等感を懐き、自転車で1時間近かけて学校から帰ると夕暮れの石切り場でトロッコを押し、夜にはファイゴを吹いて父親の手伝いをしていることで心は暗かった。⁽⁴⁾

太田は柴田の励ましの言葉に感激し、その晩は夜も眠れず、期待に何とか応えようと決心した。太田の暗い心に明るい光が差し込んできて、心はずんで学校生活が楽しくなった翌日、再び柴田は太田に声をかけて言った。

「おれはあのいつまでたっても忘れられない歌をうたいつづける。その歌を誰か若い奴がまたそのまま歌いつづける。そういう若い奴がみつかったらええ、たったひとりでええと、そう思っていたんだ。その歌をうたいつづけてくれそんな奴はいないか？ といっしょうけんめいにさがしていたんだ。ところが、こんどそいつが見つかった。それは君だ。」この言葉に太田は再度感激し、涙にむせぶった。この二日間で太田の人生観は一変したような気がした。⁵⁾このような太田俊雄と柴田俊太郎の出会いの中から、二人の間に師弟愛が育まれていった。

3. 本間俊平の生涯と宗教教育実践

本間俊平は、1873年に越後国三島郡間瀬村字高屋（新潟県新潟市西蒲区間瀬）第336番戸に本間孫志郎とジョン（順）の長男として生まれた。⁶⁾父は役場の嘱託などをしていて、俊平には三人の姉がいた。俊平は小学校初等科を出たが、飢饉で小学校が廃校となった。その当時の間瀬村では漁師か大工しか職がなかったが、小学校中等科を退学して大工となり、福島県北会津、同県信夫郡、仙台で出稼ぎをした。1891年の春に仙台で初めて押川方義、植村正久、原田助のキリスト教演説会に出て、演説の妨害をした。だが、弁士の命がけの姿に感銘を受けて、その帰りには古本屋で新約聖書を求めて、翌朝までにヨハネ福音書を読んだ。

1893年には北海道に渡り、道庁に勤務して札幌師範学校の建築に従事したが、翌年には道庁を退職し、職を求めて汽車賃を節約するために徒歩で上京し、大倉土木組に入社し、日清戦争のために朝鮮に派遣された。1896年には横浜へ転勤となり、キリスト者の奥江清之助と知り合いになり、キリスト教に導かれ、さらに遠藤ツキと結婚した。

1897年の24歳の時に霊南坂教会で留岡幸助牧師から受洗し、受洗の直後に執事に選ばれ、日曜学校の教師となり、教会堂の大修理に率先してその役割を引き受けた。また、芝区（港区）愛宕町1丁目に住み、北海道家庭学校を建てた留岡幸助牧師に見習って初めて出獄者を引き取って世話をし始めた。

1898年には華族の御殿の建て替え工事で恩赦によって出獄してきた人を事務見習いとして使っていたことを建て主から訴えられ、その建築担当責任者として大倉組を解雇された。1900年には宮内省東宮御所造営局に採用され東宮御所の造営に携わったが、宮内庁職員の安定した職を投げ捨てて信仰によって新しい歩みを始めることになった。

1902年に山口県秋吉台の小川資源の大理石山を引き受けて極貧の中で長門大理石採掘

所を開設し、翌年には出獄者や非行少年約40人を預かった。1908年までに190人余りの人々を更生させて社会に送り出した。1913年に芝浦製作所の仕事を引き受けたりして、次第に販路を拡大していき、事業は安定していった。1927年には息子の五郎が結婚して、大理石工場の後継者となった。

1906年頃から各地で講演を始めていたが、1930年には東京で50日間に約100回講演し、1931年には秋吉台を去ってもっぱら講演活動に専念し、四国で50回講演、1932年には満州朝鮮で50回講演をして、その後も日本各地で講演活動に従事した。⁽⁷⁾最晩年には郷里に戻り、1948年に間瀬村で逝去、享年75歳であった。⁽⁸⁾

本間俊平は、留岡幸助が巢鴨で始めた少年感化の「家庭学校」、原胤昭が神田で始めた刑余者のための「原寄宿舍」、石井十次の「岡山孤児院」などのキリスト教に基づく我が国で最初の社会事業に刺激を受け、それら事業から学び影響を受けたが、それらとはまた違った本間独特の方法で、聖なる労働を通して人間教育を行なっていった。

本間俊平は、大理石の山を人間形成の道場として、人生に生き悩み、学校の教師が匙を投げ、家庭の人間関係がどうにもならなくなった青年たち、刑を終えても身内の者にも顧みられず、社会でも受け入れられない人々を受け入れ、労働によって罪を潔め、魂を更生の光に導こうとした。

大理石は配電盤、医療器具、墓石、建築資材などに用いられた。毎日、朝4時半に起床（朝食当番はその1時間前に起床）、朝礼拝の後5時朝食（麦飯・味噌汁・漬物）、5時半から石切り場の山に上る者と大理石工場に分かれて仕事に入り、10時10分間休憩、12時昼食1時間休憩、4時10分間休憩、6時に仕事を終え、山を下り入浴し、7時夕食、8時半夕礼拝、9時就寝、一日11時間の労働であった。日曜日には労働を休んで、大理石工場の土間がかたづけられて礼拝堂になり、服装を正して家族や来訪者も出席して、厳粛な礼拝が捧げられた。礼拝では本間が説教した。やがて日曜学校も始めていった。

山での労働は、最初に大理石を覆っている土壌を取り除く。次に、大理石層に穴を開けて、爆薬をつめて打ち壊す。砕けた大理石の大きな塊を運びやすいように角をとる。工場では、鉄板の鋸で切り割り、用途に応じた形にし、数度の磨きをかける。

本間俊平にとって大理石採石のこの過程は魂を磨く人間教育の過程の象徴であった。まず、魂を覆っている世間体・見栄・虚栄・偽善などの土壌を取り除き、純白な魂をさらけ出す。次に、イエス・キリストの霊火をつけて破裂させる。それから角を落とし、加工して磨きをかけ、人前に出す。⁽⁹⁾

長門大理石採石所は、大理石の採石場であるばかりでなく、自ら修養生と名乗る学生たちが本間俊平の仁徳を慕って、近くの山口高商の学生や遠くからも次第に集まってきて、修養のための道場と化していた。また、広島高等師範の小西重直教授や栗原基教授らも秋

吉台を訪問し、本間の教育システムは多くの示唆を与えていった。広島高等師範の学生であった赤井米吉は一夏を秋吉台の採石所で過ごしたが、この経験を取り入れて後に明星学園を創設してその学園長となった。小原国芳も鹿児島師範学校で既に本間俊平の話を聞いていたが、広島高等師範学校に入学すると冬休みの帰省の途中で秋吉台を訪問した。小原国芳は本間俊平を師と仰ぎ、この経験を後に労作として取り入れて玉川学園を創設した。⁽¹⁰⁾ 柴田俊太郎も学生時代に、修養のため秋吉台を訪れた一人であった。

4. 柴田俊太郎の生涯と宗教教育実践

柴田俊太郎は、1897年に澤田虎蔵と逸子の三男として鳥取県岩美郡岩美町浦富に生まれた。柴田の生家の澤田家は浦富で代々漁業や網製造を営み因幡長者として続いた名家で、父虎蔵（1874-1947年）は町政や郡政を行なった後に、県会議員を務めて地方自治や地域の産業振興に貢献した。この地方切っでの進歩的な産業人で文化人であった。また有数の読書家であり、その蔵書は小図書館をなしていた。母逸子は社会事業家として知られ、俊太郎は厳格なキリスト教による厳格な家庭教育の下で育てられた。⁽¹¹⁾

また、澤田分家を始めた俊太郎の父の叔母の澤田久子（1867-1929年）は節蔵・廉三・退蔵の母で、地域婦人運動を行ない、浦富にあった鳥取教会岩美講義所の開設に尽力した。久子の夫の澤田信五は浦富町長、県会議員、県参事会員として活躍したばかりでなく、北海道各地で漁業や牧場を経営した。父のいとこの澤田節蔵（1884-1976年）は、ニューヨーク総領事、国際連盟事務局長、ブラジル大使を経た外交官で、その後NHK会長や東京外国語大学学長を務めた。俊太郎が敬慕していた⁽¹²⁾ 次の弟の澤田廉三（1888-1970年）は、フランス大使やビルマ大使などとして活躍し、戦後初の国連大使となった外交官であった。廉三の妻の美喜（1901-1980年）は岩崎弥太郎の孫娘で、戦後エリザベス・サンダー・ホームを開設した社会事業家であった。一番下の弟の澤田退蔵（1893-1970年）は、実業家で、東京特殊紡績を設立した。澤田家とその一族はこのような地元の名士を生み出している家系であった。

俊太郎は、小さい時からの腕白であったが、旧制鳥取一中時代は、生徒に対しても先生に対してもイタズラをして、先生から匙を投げられた生徒であった。また、体格がよく柔道にも相撲にも強かった。1915年に鳥取中学第27期生として卒業した。その後、同志社大学に進学し、そこでは相撲部の大将を務めた。⁽¹³⁾ 1923年に同志社大学を卒業するとバートレット宣教師の指導により尼崎市で尼崎市基督教会夜学校を設立し、自ら教壇に立って英語と数学を教え青年教育に従事した。1927年から3年半の間、旧制中学の岡山巒で英語教師をした。そこで太田俊雄と出会ったのである。1928年に鳥取市の素封家柴田秀蔵の娘雪枝と結婚し、婿養子となった。

その後、1930年夏に柴田家の父親の看病のために鳥取に戻り、鳥取教会の関連施設として南窓館を設立して、その代表者となり社会教育活動の先駆者となった。南窓館は青年の活動拠点として用いられ、家政科・英文科・タイプ科などがあり、柴田俊太郎は夜学校で自ら教鞭をとった。南窓館は一種の文化センターとしての役割を果たしていた。また鳥取兄弟社を結成した。1935年には独力で巨費を投じて当時鳥取市で画期的な鳥取洋裁女子校を開設して校長となり、職業婦人の育成に貢献したが、戦時中に閉鎖を余儀なくされた。

長年にわたって日曜学校長、教会役員を務め、教会活動の中心的な役割を果たした。日本のキリスト教を土着化させて発展させるためには墓地が必要と考えて、鳥取市内の丸山の山頂の私有地に教会墓地を造成した。また、戦時中にベネット宣教師帰米の際には宣教師館を買い上げて、自宅をそこに移して教会経営に貢献した。

さらに、戦後に鳥取市YMCAを設立して理事長となり、「人格の発達と社会の発展に寄与する」という年来の志を実現することに努めた。YMCA主催により鳥取で初めて小学生に初等英語教育を実施し、「歌による英語入門教育」を考案し、「自作の英語カルタ」を出版して、ユニークな英語教育に情熱を注いだ。また、鳥取ロータリークラブの設立にも尽力した。

柴田俊太郎は家業と関係して実業人としても活躍した。1937年には山陰製函株式会社を創立して取締役社長になり、1942年には三つの木材業者を一つにまとめて鳥取林材株式会社を興して取締役社長になり、1950年には中国理化産業株式会社を創業して取締役社長に任じられた。しかし、実業人としてよりは異色の社会教育者として活躍した。1953年に東京通信病院で逝去した。⁽¹⁴⁾享年55歳であった。

柴田俊太郎は同志社大学では政治学者の中島重に師事し、「社会的キリスト教」の影響を受けてその実践者となっていた。⁽¹⁵⁾中島重はキリスト教自由主義者であり、多元的国家論を唱えたが、1928年頃から形成されていった「社会的キリスト教」の理論的支柱であった。⁽¹⁶⁾

「社会的キリスト教」とは、次第に日本のファシズムが台頭してくる中で、国家と教会の一致を唱える「日本的キリスト教」とは異なる道を歩んだ学生キリスト教運動（Student Christian Movement ; SCM）の中から出てきた。「社会的キリスト教」は、学生キリスト教運動がプロレタリアの解放のために階級闘争に参加すべきだというという過激なグループに傾いていくのに対して、社会的キリスト教理論を確立して教会に働きかけるべきだとする穏健なグループを指す。それは、イエスの贖罪愛による「神の国」運動を展開し、理想的な共同社会の建設を目指して活動していった。例えば、次のような社会的キリスト教綱要の中に「社会的キリスト教」の精神が要約されている。

「我等はイエスに従いて、神を人類共通の父と仰ぎ、神の国の実現を以て、基督教徒の根本使命なりと信ず。我等は神の国の実現は、イエスの十字架に顕われたる、贖罪愛の実践に依りてのみ可能なりと信じ、自ら贖罪愛の生活者たらんことを期す。我等はイエスの福音に依り、神の国に適わしき人格を造り、且つ神の国の理想に背反する、一切の社会組織及び制度の根本的改革を図り、以て新しき共同社会の建設を期す。我等はイエスの兄弟愛精神に則り、一切の軍国主義的思想を排除し、各国民相互の協同に由る、国際平和の維持増進を図り、以て世界連邦の実現に貢献せんことを期す。」⁽¹⁷⁾

中島重の「社会的キリスト教」を実践するために堺教会牧師の中村遙は大阪水上隣保館を始めとする一連の社会福祉施設を作っていた。嶋田啓一郎は、「社会的キリスト教」を社会福祉理論として展開していった。⁽¹⁸⁾ 柴田俊太郎は本間俊平の人間教育に影響を受けると同時に、次第に「社会的キリスト教」の影響も受けていった。岡山巒を去った後に、鳥取教会で様々な社会事業を先駆的に展開していった背後にあったのは、このような思想の実践であった。また、柴田俊太郎はこのような思想を実践するコミュニケーションの手段として、英語を用いることを重視し、英語教師となって英語教育を実践した。それは1913年に鳥取教会に来て17年間鳥取に滞在した女性宣教師コーラから受けた英語教育によるところが大きい。⁽¹⁹⁾ これらの活動を通して、愛と自由の精神に基づき、個性と人間性の尊重を高く掲げた新しい世界観による教育と社会事業を実践し、それに献身した。

5. 太田俊雄と柴田俊太郎と本間俊平

太田俊雄は、徴兵されて2週間も経たぬうちに中隊長に呼び出され「貴様はタマよけには惜しい、帰れ！」と言われて除隊した後に、教師となることを決心し、柴田俊太郎を教師のモデルとした。「柴田先生が自分にして下さったようなことを、やがて自分が教師として立った時に、生徒にしてやりたかった」からである。それらは「筋金の通った信仰、柔道、そして英語」であった。⁽²⁰⁾ そしてそれらをすぐ実行した。まず、柴田俊太郎から贈られた聖書を手にして牛込福音教会で教会に通い始め洗礼を受けた。⁽²¹⁾ また、神楽坂警察署の柔道場に通い始めた。⁽²²⁾ さらに、苦学して法政大学の夜間部で英語教師となるのに必要な学びをしたが、就職難の中でも教壇に立つ道が開かれた。⁽²³⁾

太田俊雄はまた、柴田俊太郎が課外授業で英詩や英語讃美歌を教えたように、青森中学時代には毎週火曜日に家庭を開放して「火曜会」を数か月間続け、水口中学時代には教会堂で土曜日に「土曜会」を開き、八尾中学時代には毎週学校の教室や校庭でバイブル・クラスを開いていたが、学校で宗教を教えることへの校長らの反対でその後は自宅で「まねび会」を開いた。それらの中から洗礼を受ける生徒らや英語に秀でて後に大学教授になった生徒らが出てきた。

太田俊雄はさらに、悪態をつく友人らと盗んだ鶏を柴田俊太郎と一緒に食べさせて、食べた後でそれが盗んだ鳥であることを知った先生が頭ごなしに叱りつけるのではなく、生徒と同じ立場に立って自分の経験を述べて生徒らを赦した上で今後二度としないように警告を与えたように、⁽²⁴⁾ 生徒らが盗んだ鯉とは知らずに一緒に食べさせられて、食べた後でそれが盗んだ魚であることを知って、同じように赦す経験をさせられた。⁽²⁵⁾

太田俊雄自身が劣等感にさいなまされていた時に、柴田俊太郎が太田に枯れ木の桜を見せ、春が来ると百花爛漫となる神の業の不思議さを指摘し、太田は人間の秘められた可能性への希望を懐かせられる経験をしたが、⁽²⁶⁾ 成績不良の問題児で劣等感に落ち入っていた生徒に同じ経験をさせて立ち直らせたことがあった。⁽²⁷⁾ このことを通して、どんな問題児や劣等生とレッテルを貼られている生徒であっても、内に秘めた可能性があることを太田は改めて知り、やがてそれを安積得也の「人皆に美しき種あり、明日何が咲くか」の詩に見出したのである。⁽²⁸⁾

これは本間俊平の人間観や教育観にも通じる。本間は「神が人間の靈魂中に植えつけておいた宝物を引き出して、これを人格にまで成長させるのが真の精神教育である」と述べた。⁽²⁹⁾ ここから不良行為で生徒が退学処罰になる是非について問われた時に、本間は長文の手紙を書き、それを読んだ校長は、逆に生徒たちに自分の不行き届きで生徒らを過失に陥れてしまったことを詫び、今後は生徒たちを十分に教育することを誓った。こうして処罰されなかった生徒たちは全く変わり、学校は生徒の風紀を処罰することをやめて、愛の学校へと生まれ変わったのである。⁽³⁰⁾ これらはいずれも新約聖書の人間観や教育観に遡るキリスト教の人間観・教育観である。⁽³¹⁾

太田俊雄は、柴田俊太郎との直接的な出会いと柴田の人間教育のモデルである本間俊平との間接的な出会いを通して、人間の教育とは何であるか、生身を通して経験した。このような人間教育の共鳴的な経験に基づいて、後にルソーやペスタロッチやフレーベルやデューイの人間教育の古典を紐解いていくことになったのである。

註

- (1) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（一）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）、115-126頁。尚、その後、ホーレス・ブッシュネル『キリスト教養育』（森田美千代訳、教文館、2009年）が出版された。
- (2) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（二）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第9号（2011年）、1-10頁。
- (3) 太田俊雄の生涯について、太田俊雄『矢と歌』（敬和学園史レポート集成Vol.16）2010年、太田俊雄『続 矢と歌』（敬和学園史レポート集成Vol.17）2010年、田中芳三『種子をまく人：賀川豊彦を巡る人々（2）』一麦社、1963年、参照。
- (4) 太田俊雄『矢と歌』7-11頁。
- (5) 太田俊雄『矢と歌』11-16頁。
- (6) 本間俊平の生涯について、三吉明『本間俊平の生涯』福音館書店、1966年、参照。新潟市西蒲区間瀬（旧西蒲原郡岩室村間瀬）の高屋ふれあいセンター前には本間俊平生誕碑がある。尚、科学史・科学哲学の村上陽一郎先生から、本間俊平が森鷗外の私小説『鎚一下』で「H君」として登場することをご教示して頂いた。（森鷗外『森鷗外全集』第3巻、筑摩書房、1971年、69-75、329-331頁。村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年、275頁、参照）。三吉明「本間俊平研究」同『キリスト者社会福祉事業家の足跡』金子書房、1984年、69-88頁、参照。
- (7) 講演の一部は、『本間俊平選集』本間俊平選集刊行会、1959年、に収録。
- (8) 新潟市西蒲区間瀬（旧西蒲原郡岩室村間瀬）の海雲寺の墓地に本間俊平とその一家の墓が小さな地蔵群になって祀られている。また、秋吉台にも小さな墓地があることを村上陽一郎先生から手紙でご教示して頂いた、村上陽一郎『あらためて教養とは』275-276頁、参照。
- (9) 三吉明『本間俊平の生涯』141頁。
- (10) 小原国芳『秋吉台の聖人本間先生』（小原国芳全集第11巻）玉川学園出版局、1973年。
- (11) 柴田俊太郎の生涯の概略について、因伯人物誌刊行会『因伯人物誌』1951年、54頁、鶴田憲次『因伯青春の系譜：鳥取一中の巻』（鳥取西高同窓会）富士書店、1978年、214-216頁、日本基督教団鳥取教会『鳥取教会百年史』1992年、162-163頁、参照。
- (12) 太田俊雄『続 矢と歌』、210頁。
- (13) 鶴田憲次『因伯青春の系譜』214-216頁。
- (14) 太田俊雄『続 矢と歌』209-214頁。
- (15) 太田俊雄『矢と歌』17頁。
- (16) 中島重『社会的基督教概論』同志社労働者ミッション、1929年。中島重『社会的基督教と新しき神の体験』基督教学生運動出版部、1931年（鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集 第IV期 キリスト教と社会・国家編』第32巻、日本図書センター、2004年、所収）。
- (17) 1950年頃の東神戸教会の「社会的キリスト教綱領」。
- (18) 嶋田啓一郎『福音と社会』日本基督教団出版局、1971年、他。
- (19) 太田俊雄『続 矢と歌』214-215頁。
- (20) 太田俊雄『矢と歌』184-185頁。
- (21) 太田俊雄『矢と歌』165-170、178-181頁。
- (22) 太田俊雄『矢と歌』184-185頁。
- (23) 太田俊雄『矢と歌』171-223頁。
- (24) 太田俊雄『矢と歌』94-107頁。
- (25) 太田俊雄『続 矢と歌』45-48頁。
- (26) 太田俊雄『矢と歌』44-46頁。

- (27) 太田俊雄『続 矢と歌』163-177頁。
- (28) 太田俊雄『続 矢と歌』177-185頁。
- (29) 三吉 明『本間俊平の生涯』164頁。
- (30) 三吉 明『本間俊平の生涯』190-191頁。
- (31) IIコリント4：7、ヤコブ4：5、ルカ13：6-9。